

要 旨

信頼度・満足度調査を用いた小学生による保健室経営評価の試み

宮腰 明子

保健室経営の評価は、自己評価と他者評価の両方でとらえることが重要である。そこで、本研究では、他者評価として「児童の視点」を取り入れた。評価尺度は、医療機関で行われている患者満足度調査をモデルにして開発した保健室に対する満足度尺度を用いた。本研究は、研究1(信頼度・満足度の要因研究)と研究2(教育実践研究)で構成されている。

研究1では、信頼度・満足度尺度と基本属性の関係、及び、保健室に対する児童の信頼度に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的として、東京都公立小学校6校の6年生443名を対象として質問紙調査を行った。保健室に対する児童の評価を測定するために、保健室の機能や養護活動に関する20項目を満足度尺度、保健室に対する信頼感に関する3項目を信頼度尺度として分析を行った。t検定の結果、「保健室の利用」「満足度」「信頼度」は男子より女子の得点が有意に高かった。これは、男子より女子の方が利用回数は多く、保健室に対する満足感や信頼感も強く感じていることを意味する。パス解析の結果、「保健室の利用」は「満足度」を介さず、直接「信頼度」と関連していた。これは、保健室の利用が多いほど、信頼度が高くなることを意味している。また、児童の「健康への興味関心」「健康的な生活に対する努力」「生活環境や自己への肯定感」は、「満足度」を介して間接的に「信頼度」と関連していた。これは、健康に対し関心を持って望ましい生活習慣が身についている児童、また、自分の身の周りの環境や自己を肯定的に受け入れている児童ほど、保健室への満足度は高く、その結果、信頼度も高くなることを意味している。研究2では、研究1の結果を踏まえて、児童の満足度調査から自校の課題を明確にし、その課題解決のための教育実践をし、その効果を明らかにすることを目的とした。実践前と実践後の差を検討した結果、「自分自身が好きだ。今の自分に満足している」「保健室に行って良かった」等の項目において、実践前よりも実践後の平均値が高く、有意な差がみられた。これは、教育実践が児童の自己肯定感等を高め、保健室に対する満足感を高めることに有効であったことを示している。保健室に対する児童の信頼度を高めるためには、保健室の機能や養護対応の改善と同時に、児童自身の健康に対する意識や生活習慣、肯定感等の背景要因をより健康に近づける教育を実践することが重要であることが示唆された。

本研究により、他者評価に「児童の視点」を取り入れることは、保健室経営のPDCAサイクルを活性化させ、児童の健康づくりを効果的に推進することが明らかになった。今後養護教諭は、他者評価において積極的に「児童の視点」を取り入れる必要がある。

キーワード : 教育実践 児童の視点 信頼度・満足度調査 他者評価